

## 平成26年度FD推進ワークショップ(新任専任教員向け) 参加報告会(新任教員就任時フォローアップ研修)

日時：2014年12月8日(月) 15:10~16:30(80分)

場所：深草学舎 紫英館東第2会議室、瀬田学舎 1号館1階理事室

参加対象：今年度本学へ着任された教育職員

大学教育開発センターでは、龍谷大学に今年度着任された教育職員の方々を対象として、今後の教育研究活動等を円滑に進めていくためのフォローアップ研修を実施しています。

今年度の就任教員就任時フォローアップ研修では、8月に日本私立大学連盟主催で行われた「平成26年度FD推進ワークショップ(新任専任教員向け)」に参加いただいた西尾純子先生(文学部)、野呂靖先生(文学部)の2名に研修の参加報告をいただくとともに、長谷川岳史大学教育開発センター長から、最近の大学教育を巡る動向と本学における教育支援についてお話いただきました。

### はじめに

#### ○長谷川

日本私立大学連盟の平成26年度FD推進ワークショップ(新任専任教員向け)ということで、新任専任教員向けのワークショップはいろんなところで開かれています。特にこの私大連の新任教員向けのワークショップは浜松で毎年行われておりまして「浜松の私大連」というところのワークショップを指すくらい、非常に長い歴史を持つ研修です。

本研修は就任してから4年目までの先生を対象にしておりまして、今年は文学部から西尾先生と野呂先生お二方に参加いただいたので、その報告をしていただくとともに、私から最近の大学教育をめぐる情報を提供させていただきます。

この私大連の研修の特徴は、主に模擬授業を展開するわけですが、理系も文系も一緒に6、7名のグループになって行われます。模擬授業を行っているときは他の人は学生役をするという形の図式を取っていますので、分野別の模擬授業とかそういうところで専門のスキルアップをするようなものもあるのですが、全く異分野の人達のアイデアをうまく吸収できるということに特徴があります。

まず最初に、オリエンテーションということで、FDとは？ということの説明した後、パネルディスカッションとグループ討議を行います。グループ討議では、お互い新任になって抱えた悩み等を話し合う場です。それが終わるとワークシートの作成と模擬授業となります。ワークシートをその日の懇親会までに提出しないと、懇親会の入場券がもらえないという仕組みになっていますので、まずレジュメを提出して、その後翌日の模擬授業に入る形になっています。模擬授業の当日は提出したレ

ジュメを学生役に全部配られ、これを確認しながら学生役は聞いています。使えるのはホワイトボードのみで、パソコンもパワーポイントも使えません。聞いた学生役の先生はコメントシートに授業の手法や授業案等の総評をつけ、模擬講義をした先生にお返しします。今日は参加者レポートという形で西尾先生と野呂先生がご提出いただいた原稿をもとに報告いただきたいと考えております。

本学のように、参加報告という学内で成果共有する機会の有無があると答えた大学は31.2%なので、個人の経験として終わってしまっているという事態があります。毎年こういう形で新任の先生を交えながら報告会を開いてフィードバックをする機会を設けたいと思います。

#### ○西尾

文学部の西尾純子と申します。私が担当しておりますのは図書館情報学という科目になります。簡単に私の経歴を申し上げますと、大阪のアメリカ領事館の資料室にて長年勤務した後、大学の教壇に立つということになりました。授業に関しては、図書館員になる前にほんの数年度程度中学と高校で教えていたこともあります。大学の講義は2年前に初めて教壇に立ちました。その後、非常勤講師を経て、この4月から勤務しております。

授業が始まってみると、資格科目というのもあって130名、140名という学生さんが大教室にワッと座っていてかなり圧倒され、大人数クラスをいかにマネジメントするかということについて悩んでいました。そこで、「大人数クラスをいかにマネジメントするか」と書いてある本があったので読んでみたら、大人数クラスであっても机間巡視をするということや、レスポ

ンスを学生さんにしてもらおう等、すでに実践していることが本に書かれていたので、自分の悩みを解決するまでには至りませんでした。このように悩みながら過ごしていたところ、私大連のワークショップに参加しませんかというメールのお誘いがあり、申し込いたしました。

ワークショップの始まる前にアンケート結果を拝見していると、大学から割り当てられたので仕方がなく行くことにしたと書いている方が多かったので、そんなものなのかと思っていたのですが、実際に行ってみると皆さん積極的に議論に参加されておられ、授業について色々コメントいただきました。

ワークショップでは全体討議やパネルディスカッションを行った後、各グループに分かれて、どういった内容で授業運営に悩んでいるかという情報共有を行いました。私自身、分野知識に関しては実務にも長年携わっておりましたので自信はありましたが、大学の科目として、どのように面白さを伝えられるかという点に関しては悩んでおりましたので、そのようなことを話しました。

その後はホワイトボードとマジックだけを使って決められた時間で模擬授業を行いました。「何も準備をしておなくていい」とのことだったので、その時点でどの科目の話をするかと悩みました。模擬授業の評価に関しては、高評価をいただけたので、これまでの授業法が間違いではなかったのかな、と自信にも繋がりました。他の方がされた模擬授業では、パワーポイントを見せている時や話している時に、学生が何をしているのかという点にも気配りされていたり、また、導入部分で雑談を取り入れながら本論に入っていくという手法をとられていたりしたので、後期授業で実践したところ、学期半ばの授業アンケート結果で「前期より良くなった」と意見を書いてくれる学生もおり、暑い中ワークショップに参加した甲斐があったなと思いました。

#### ○長谷川

西尾先生ありがとうございました。模擬授業について、毎年アンケートには、「準備したかった」とか、「パワーポイントを使いたかった」等が挙がります。しかし、私大連のコンセプトは全くゼロの段階から、限られた時間の中で指導案を作ってみて、さらにそれを授業の原点である黒板とチョークに立ち返って行うという点を重視しております。

#### ○野呂

私は文学部の仏教学科に所属しております、長谷川先生の後輩なんですけども、長谷川先生からこういうのがあるんだよ、とお話をいただきまして断るわけにもいかず（一同笑い）、参加いたしました。以前からどのように教室マネジメントするのか、自分の講義がちゃんと運営できているのかということに関心を持っており、西尾先生もおっしゃっていた大学教育の実務、というような本を個人的に読んでいたのですが、実践すると上手くいくけれども、長続きしないことに頭を悩ませていました。大人数の講義でどのように双方向のコミュニケーションをとるのが大きな課題と考えておまして、ワークショップでなにかヒントが得られないか参加した次第です。

最初のオリエンテーションで委員長の先生がお話されるのですが、いくつか印象的な言葉がありました。その一つに「プロ

の教員として大事なことは、研究と教育と社会活動と大学運営の4つをバランス良くトータルで進めていけるかということが大事だ」というお言葉です。講義のプリントを作っていると、あっという間に時間が過ぎてしまうものです。教育に力を入れるのは当然ですが、講義の組み立てに力を注ぎすぎて、研究等が疎かになるのは良くない。どうやってバランスをとるかということは大きな課題ですが、大事なことだと思いました。

模擬授業のワークシートでは、教員の活動についてはたくさん書けるのに、それに対する学生の活動について、講義を聴く、ノートをとる、といった活動以外全く書けないということに気づきました。そこで、私は自分が伝えたいことは一方的に伝えているけれども、その間が学生がどのような気づきを得たり、何をしているのか、ということまで意識が向いていなかったことに気づかされました。模擬授業は10名前後の前で行い、大変緊張しました。フィードバックのコメントは7:3で良い所と改善する所を書くため、たくさん良いコメントをいただきましたが、改善点としては、板書の仕方についてご指摘いただき、非常に参考になりました。その他の先生が模擬授業されている中であったコメントとしては、15回の授業の中で、今回の授業がどういう意味を持つのか、と意識しながら授業をした方が良かったといった意見や、期末試験で何を問うのか、ということ念頭に授業プランを練ってはどうか、という意見もあり、自身にいただいたコメントではありませんでしたが、大変参考になりました。そこで、後期の授業を始める時に試験問題を作ってみました。授業のまとまりが出たかなと感じています。まだ授業は終わっていないので何とも言えませんが、有効という印象です。このワークショップの良い点は、分野や大学の枠を超えて、自分だけが悩んでいるのでは？と感じていたことを共有しあえる点が良いと思います。

最後に、テストを作ってから授業を考える、また、私は資料をたくさん配付するのですが、配付するにあたっては穴埋め式のプリントで、しゃべっている内容を入れさせるようにします。穴埋めをする内容は単語ではなく、文章で書かせるということが大切です。ワークショップで学んだ手法を用いて後期授業を行ったところ、比較的熱心に授業を受けているな、という印象です。

#### ○長谷川

野呂先生ありがとうございました。今の西尾先生と野呂先生のご報告でお聞きしたいところがあったらどなたからでも結構です。いかがですか。

#### ○参加者A

授業中に学生に何かをやらせる、という発想がなかったので、実践してみたいと思いました。

#### ○参加者B

2012年度に参加させていただき、西尾先生と野呂先生がおっしゃられたような感想を持ったのを覚えています。今後、国際学部が移ってきますので、人数調整できないクラスもあるでしょうし、大人数講義も予想されるので、西尾先生が報告くださった内容が重要になってくると感じました。また、野呂先生から

頂いた話の中にあつた、具体的な試験内容を踏まえて授業プランを立てるということは、学生にとっても非常に分かり易くなるのではと思います、メモをとらせていただきました。

### ○参加者C

理系ですと回答がだいたい決まっているので、授業の最初に期末考査の問題を提示するというのは成績評価をする上で難しいと感じます。

### ○長谷川

そうですね。文系と理系では到達目標の提示の方法に違いがあるのかなと思います。

では、私から簡単に昨今の大学教育に関する情報をお伝えしたいと思います。大学教育に関するテーマは1991年に行われた大学設置基準の大綱化から大きく変わっていません。大綱化によって教育編成の自由が認められたことで、29だった学士号が約800にも増えました。カリキュラムを自由につくっていくが、そのかわり教育内容や方法について組織的な研修を推進すること＝FDや自己点検評価の体制を確立してくださいね、ということです。つまり、FDと自己点検評価というのは教育編成の自由を与える代わりに、自己管理しなさいということ提示された側面があります。ただ、これがなかなか進まないの、努力義務から義務化へとシフトします。2005年「我が国の高等教育の将来像」では、大学の特徴づけをしなさいということで、機能別分化という考えがでてきます。現在では機能別強化という言い方がされますが、考え方は概ね変わっていません。「世界的研究・教育拠点」は「グローバル教育」ということで言い換えをしているだけでこの時から推進していますし、「社会貢献機能」はCOCという形で展開しています。2008年「学士課程教育の構築に向けて」では単位の実質化が言われるようになります。1単位45時間の学習を確保しなさいとか、単位制度を取っている限り、それを実施しないとイケない。「学士力」という表現が多様されているのもここからです。加えて2011年にはキャリア教育とかグローバル化社会、社会人基礎力なんて言葉が出てきますが、これは文科省の主体的な発想ではなく経産省発のもので、同様の流れで国際化とグローバル化という、厳密に言うと少しニュアンスが異なる言葉が全て「グローバル化」という形で表現されるようになる。このように、同じような文脈だけれども、言い換えがかなり進んで複雑になっているのが現状です。

2012年の質的転換答申でアクティブラーニングや主体的に考える力、プログラムとしての学士課程教育ということが出てきます。最後に授業の工程表としてのシラバスということで、シラバスを組織的に作る事が大事であるという形になっていく。あと高大接続特別部会というものがありますが、1999年の中教審答申で初等高等教育と高等教育の接続の改善についてはすでに述べられていて、15年ぶりに復活したというだけの話なんです。これは今、非常に重くのしかかってきていて、2013年の教育再生実行会議で、入試制度改革に伴う学制の在り方という議論になっています。FDと評価という観点からしますと、元々は教員個々の授業内容・方法の改善ということで授業アンケートをやっていけば良いという形でスタートしましたが、現在FDの範疇はかなり広く捉えるようになっていきます。

研究、社会貢献、管理運営にも広がってますし、教員評価やIR、学習支援環境にも広がってきてます。なぜ拡大したかという、例えば、高校教員は約38万人いて、全員が教員免許を持っているわけですが、大学教員は約17、8万人もいながら高校教員のような教員免許はありません。全員無免許運転をしてると見なされかねないので、先程の大綱化のところ述べてように、FDと自己点検評価によって自らの資質を社会に説明できるように確保することが目的です。研究だけやっていけばいいという段階から、プロの教員としての自らの努力によって資質を確保しなさいという段階にきているのが今の現状です。

認証評価もこういった基準で行っています。基準4の教育内容・方法・成果目標に基づいてカリキュラムがあり、シラバスに基づいて授業が展開されているか、成績評価と単位認定は適切に行われているか、成果についての検証が行われているかとか、なかなか判断が難しいところですが、この成果の部分は今後確実にシビアに見られるようになります。ここで一番重要なのはシラバスの到達目標です。シラバスの到達目標を測る試験を行い、成績を出しているかというところが核となり、この積み重ねがCPの実現、DPの保証に繋がっているかということ問うようになっていきます。各ポリシーを作り、その方向に概ね向かっていけばいいというのが現段階ですが、だんだんとミクロの部分までのチェックが深くなってきます。今までは内部質保証の構築でよかったけど、これからは実質化＝アウトプットがテーマになるとははっきり言われているので、ますます先生方のシラバスの内容が注目を浴びてくるということです。

資料4頁には学士課程教育における授業の位置づけということで表を載せています。各授業科目の到達目標がカリキュラムに、カリキュラムが教育課程の編成・実施方針に…というように、一つ一つを繋がりて捉えないと、大学教育というのはまわっていかない。先に述べたように、下に向かうほどチェックが厳しくなる。ですから、各授業で到達目標と成績評価基準を開示していないことはあり得ないし、最初に提示した到達目標を教員の都合で勝手に変更することは通用しない。ただ、シラバス公開前に一定組織的な内容確認をしておかないと、先生がブログのように自由にアップするシラバスになってしまうので、大学の、あるいは学部のシラバスとしてふさわしいかどうか、CPと照らし合わせる必要があります。

5頁は最近の文科省の補助金のつけ方です。文科省が提示している1階部分は基本的に各大学が既に実施しているという前提で、2階部分のスタートアップとかトライアルのために補助金をつけている状況です。5頁下段は私が作ったものですが、大学教育の質的転換ということで、これからの入試は学生個人の力の接続である「高大接続」に重点が置かれていきます。学生個人の力の継続性を計るようなものを構想しつつありますので、キャリア教育やグローバル教育といった、高校から培ってきた力を大学でどう伸ばしていくかを重視していく可能性がある。一方で補助金のつけ方を見ると、補助金の種類を大学に選ばせて、補助金を与えるかわりに、大学の理念目的を変えないと取れないような状態が通常となっています。大学自体が補助金を取ることを意味をよく考えないと、大学の個性がどんどん失われる可能性があるの、単なる高大連携事業とかいったレベルの問題として捉えるのではなく、どういう接続入試に変えていくのか大きな問題として出てくる可能性があります。

要は、学生一人の総合的な力という観点で教育を見ていくとすると、「学習」から「学修」と観点が必要であるということです。そういう意味では正課と課外を区別せずに、教育の一貫として考える必要がでてくるかもしれません。また、単位履修は条件さえクリアしてればOKという制度ですが、単位修得は目標達成しなければ卒業できないというのが本来の在り方で修得というものです。学生が授業内容を身につけているかどうかというところが問われています。これに関連して、6頁下の資料には有名なラーニングピラミッドを載せています。これは半年後に学生がどれだけ学んだ内容を覚えているかの定着率をピラミッド型で表しています。例えば上の5%というのは講義だけやった場合、半年後、学生は5%しか覚えてない。授業で「教えたつもり」と「教わったつもり」が、5%の定着率でしかないんです。読解で10%、視覚教材を使用した場合で20%、実演や実験機材を使った授業で30%という定着率になっています。一方で、学生が授業に参加させる方法を見てみると、グループディスカッションで50%、体験学習で75%、学生自身が他者に教えることで90%となっています。ただ、どれが良い、悪いと言うよりも、様々な手法を組み合わせる学生に身につけるさせるための手法を考えていくというのが大事になるということです。

7頁にアクティブラーニングは手法か？とありますが、大学教育再生加速プログラムでは、アクティブラーニングを「学生の能動的な活動を取り入れた教授・学習法」としています。これは「学生の能動的な活動を促す手法」であって、教員は学生のアクティブラーニングを促すことをしないとイケないわけです。そのために教員の役割として、あえて教えないという手法も出てくる。学習者に気付かせるということです。目的は学習者をアクティブラーナーにすることなので、学びの経験・実感としての「力としての統合」とエビデンスの蓄積・活用が不可欠です。ただ、学生をアクティブラーナーにできても、試験を受けて回答した授業アンケートも回収してしまうと、学生の手元には学んだ蓄積が何も残らない状態になってしまいますので、授業で課したレポートや回答した授業アンケート等は学修ポートフォリオに蓄積していくことが重要です。これは教授学習法をアクティブラーニングとして捉えている限り機能しません。

最近の動きを8～9頁に並べました。これはあくまでも手法なので、これらをやれば学生が主体的な学習ができるかというところではありません。反転授業なんていうのは、事前のビデオ学習が必須になってきます。予習と授業が逆転したようなものをですが、オンラインを使うというのが大前提です。これを全科目で入れたらいいかという、家でDVDばかり見る学生を育てるのがアクティブラーニングにはならないわけです。これは効果的な局面で使うべきですし、カリキュラムのバランスの中で、どれぐらいの科目でこういった手法を取り入れるの

が適切であるのかは組織で議論しないとイケません。

ルーブリック評価と学修ポートフォリオについて、文学部の卒業論文では導入してありますが、一番重要なのは成績評価基準を学生に隠さないということです。学生にどこまで到達してほしいのかということ、初期の段階で共有しておくということが大事です。当然、自由裁量の部分は少し残しておかないとイケませんが、出来る限り学生に示していくことが大事だと思います。ルーブリック評価でよく失敗する事例としては、最高得点のところが一番理想の基準を与えてしまうことです。最高得点は最低基準でもかまわないです。ここまでいけば及第点で、その上は達成度によって評価しますという形を作っておかないと、それ以外の条件に対応できなくなります。

学生参画型授業についても先ほど述べたように、ブレンド型学習で少し取り入れてもらえればと思います。大学によっては学生が何コマか授業を企画して作ったりするというのも聞きます。授業において学生が主語になりつつあるということが確実に言えます。来年は本学でもコモンズを作りますので、正課外での学修活動を促すような環境整備も重要です。

参考資料は最新の中教審の資料です。少し懸念があるのは、2011年に出された質的転換答申の取組の進捗状況について、これが今後どういう風に進められるのかということが書いてあります。例えばガバナンスのところSDや高度専門職などについて設置基準の改正を審議中ということで、SDの義務化の可能性がります。審議事項のスケジューリングを見ると、高大接続、あるいは認証評価というものも、ここ数年で急速に変わる可能性があります。ただ、最初に答申内容を羅列して見せましたけども、ある意味では実行プラン通り進んでいるとも言えます。来るべき事態というのは既に一手はおかれているという見方をしていけないと、外的な状況に振り回されるばかりです。出来るだけ状況を先取りしながら、なるべく外圧を内発に変えて主体的に動くほうが大学としてはいいのかなと思います。トップダウン、ボトムアップとか言うよりも、むしろ職員である課長や部長が中心となって、ミドルアップダウンとかいう方法で進めていくのが大学のあるべき姿じゃないかなと思います。先生方も学生と、あるいは教授会等の各関係の中でそういった意識を持っていただくことが必要になるかと思います。何につけ、授業に始まり授業に終わるというのがFDです。各授業で、特にシラバスに基づいた授業展開ということが、学生にとっても大学教育にとっても、大事なポイントとなっているんだと認識していただきたいと思います。

以上でFDサロンを終わりにさせていただきます。本日はお忙しいところありがとうございました。先生方ありがとうございました。

## FD センターレポートとは

大学教育開発センターでは、教職員間の交流の場として、各種の教育活動の経験や意見が話し合えるように「FD サロン」を2002年10月から開催しています。

大学教育開発センターの運営に関わる教職員が、話題提供者をコーディネートし運営されています。話題提供者のお話に耳を傾け、お茶でも飲みながら自由に意見交換等が行える機会として定着してきました。しかし、開催時間や開催場所の問題から、参加ができないとの声も聞かれます。そのようなことから、FD サロンでの話題を全学に環流させ、FD の取り組みを深めていくために FD サロンレポートを発行しています。

## FD センターレポート 14-1

発行日：2015年3月

発行：龍谷大学 大学教育開発センター

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町 67

TEL.075-645-2163 FAX.075-645-2190

<http://www.ryukoku.ac.jp/faculty/fd/index.html>